

地域をいかに語るか

溝 口 常 俊

I はじめに

人が地域をいかに感じるか、そして語るか。この問題は、地理学あるいは地域研究にとって非常に興味深くかつ重要なテーマだと思われる。しかし、従来、日常会話でのお国自慢とか方言の揶揄とかいう形で話題にのぼりこそすえ、真面目には議論されてこなかった。そこで、本稿では、地域の歴史を語らせてはプロ中のプロを登場させて、彼らが自分の県（地域）を如何に語っているかを分析し、そこから浮び上がってくる地域論を示したい。その上で、地域に関する私見、具体的には中心周辺論および東西文化論に対する見解を述べてみたい。

II 地域をいかに語るか

1. 歴史家の語りより

『県史シリーズ』（山川出版社）の執筆者（歴史学者）が序文として与えられたテーマ「風土と人間」¹⁾で、そこで彼らが各自の県（地域）をいかに語っているか、これを比較検討することは「地域」にこだわる地理学徒にとって、はなはだ興味深い試みだと思う。まず各県の「風土と人間」の執筆者名と、彼らが付けた副題と見出しを示しておこう（表1）。執筆者はいずれも各県に長く在住した国史学の教授、図書官員であり、郷土に対する愛着は人一倍強い。

もちろん個人差があり、執筆者が異なれば語りも異なるであろう。それは承知の上で、語りの切り口をまず「みだし」項目から探ってみよう。一瞥しただけで気づくのが○○県の自然（地形、風土）、○○県の歴史（成りたち）、○○県民性（気質）の3項目である。これがいわば地域を語る3点セットといえよう。見出しへはこのうち2項目があげられている県が多いが本文中ではいずれの県においてもセットで語られている。見出しに必ず地名がでてくるが、その地名のほとんどが近世以前の旧国名であるところが、いかにも歴史家の語りといえよう。こうしたフォーマットについてはこのあたりにして、以下、語りの内容について検討してみたい。

2. 東西文化の接するところ

内藤正中の語る島根県の歴史をひもといてみよう。「古代社会のころから、大和と北九州との東西文化が交流した接点が出雲であった。経済交流では、出雲は大坂経済圏に属し、石見は北九

表1 県史シリーズ「風土と人間」

No.	道府県名	執筆者	副題	見出し
1	北海道	榎本 守恵	蝦夷ヶ島から北海道へ	北方かすべの島、北海道の成りたち、播磨期の道民性
2	青森	宮崎 道生	神秘と反骨の青森県	青森県の地形風土、県の成りたち、県民の気質
3	岩手	森嘉 兵衛	未見の運命を担う牛	大県岩手、陸奥の盛衰、野の幸・海の幸、外的自然の破壊－公害－、内的自然の破壊－派閥抗争－、岩手の人
4	秋田	今村 義孝	雪の秋田	縦にのびた秋田、隔絶された秋田、秋田美人と秋田方言
5	福島	小林 清治	みちのくの玄関	県土のすがた、福島県の成りたち、県人気質
6	山形	菅田 康恩	やまふところにいだかれた村々	割地的な四地区、うつくしい山なみ、きびしい気候、純朴な気風
7	宮城	高橋 富雄	萩かおる宮城	みちのくもなか、国のかたち、みちのくと宮城、大藩の風土
8	茨城	瀬谷 善彦	常世の國と後進性	恵まれた風土、県花ばらと県木うめ、水戸気質と茨城人
9	栃木	大町 雅美	補陀落の光と開発の音	下野の自然、下野文化の歩み、県民気質と後進性
10	群馬	山田 武麿	関八州俯瞰の地	上毛三山と利根川、ケヌの文化と伝統、上州人気質
11	埼玉	小野 文雄	江戸の後背地	埼玉の地形、ムサシとサイタマ、県民性
12	千葉	小笠原長和	菜の花匂う千葉	房総半島、小糸割拠
13	東京	児玉 幸多	武蔵から東京へ	東京の地形、武蔵・江戸・東京、東京らしさ
14	神奈川	中丸 和伯	夢多き相武の地	湘南の四季、丹沢・箱根の美、神奈川の成り立ち、花橋と山百合
15	新潟	井上 賢夫	もの思う越路の浦	越の果てと荒海の島、忍従の歴史、越人の形質
16	富山	坂井 誠一	待望する日本海時代	躍進する富山県、苦闘の歴史、風土と性格、電力・金融の制覇
17	石川	下出 積興	緑匂う北国	加賀と能登、人と寺
18	福井	印牧 邦雄	うるわしき越山若水	嶺北と嶺南、福井の郷土性
19	山梨	磯貝 正義	壺中の天	国中と郡内、信玄公祭り、甲州人
20	長野	塚田 正明	「日本の屋根」長野県	県歌「信濃の国」、級坂多い山国、信州人気質
21	岐阜	中野効四郎	山と水に生きる	飛山濃水、水屋と合掌造り、濃飛に生きる
22	静岡	若林 淳之	静岡の虚像と実像	静岡の虚像、静岡の実像、新しい実像を追求した人びと
23	愛知	塙本 学	東西文化の接するところ	本州の中央、日本の四辻、愛知県のなりたち
24	三重	西垣 晴次	東・西の接点	商いの上手、東・西日本の接点、海国三重
25	滋賀	原田 敏丸	さざなみの淡海の国	琵琶湖と近江の文化、国の真中近江、近江の気風
26	京都	赤松 俊秀	千年の古都	京都府の地形、京都のなりたち、京都らしさ
27	大阪	藤本 篤	おし照る難波	大阪府の自然、大阪府の成りたち、大阪らしさ
28	兵庫	八木 哲浩	のじぎくの播磨路	多彩な気候・風土、天さかるひなへの道、五つの顔一つに
29	奈良	長島福太郎	豊草原瑞穂園	大和平野、溜池王国、大和は全国の縮図、ふるさと大和、大和の人
30	和歌山	安藤 精一	黒潮おどる紀州	和歌山の自然、和歌山のなりたち、和歌山らしさ
31	鳥取	山中 寿夫	光さす山かけの国	火神岳と大山、山陰と鳥取県、気風・気質と地域感情
32	島根	内藤 正中	歴史と伝説の国	山陰のなかの島根県、歴史と伝説の国
33	岡山	谷口 澄夫	うましくに吉備	吉備のくに、吉備文化のひろがり、吉備文化の伝統
34	広島	後藤 陽一	瀬戸内のまなか	中国の風土の典型、吉備高原と内陸盆地、沿岸部の発展、広島人気質
35	山口	三坂 圭治	にっぽんの関門	ゆたかな瀬戸うち、厳しい北浦の風土、歴史に生きる
36	徳島	福井 好行	美しい山と海	徳島県の自然、讃岐男に阿波女、徳島県のなりたち
37	香川	市原 欽士	玉藻よし讃岐の国	香川県の自然、香川県の成り立ち、讃岐らしさ
38	愛媛	田中 嶽雄	ゆのくに伊予	愛媛県の自然、愛媛県の成り立ち、愛媛県の県民性
39	高知	山本 大	土佐の高知	高知県の自然、高知県の成り立ち、土佐らしさ
40	福岡	平野 邦雄	その変らざるもの	福岡の位置、山・川・平野、福岡の人間性
41	佐賀	城島 正祥	唐津人と佐賀人	佐嘉と佐賀、玄界灘と有明海
42	長崎	嶺野精一郎	多島海の宿命	南国の海、海と島と半島、開かれた窓、連合長崎県、長崎の歴史から長崎県の歴史へ
43	熊本	森田 誠一	自然と歴史の中で	熊本県の自然、クマモトから熊本県へ、熊本の県民性、熊本の歴史研究の展望
44	大分	渡辺 澄夫	うも茂る豊の国	大分県の自然、大分県の成りたち、大分県民気質
45	宮崎	日高 次吉	筑紫の日向	宮崎県の地勢、宮崎県のなりたち、宮崎県民性、宮崎の現状、宮崎県史の研究状況
46	鹿児島	原口 虎雄	隼人の薩摩	鹿児島県の風土、日本の南の門戸、ハイカラ性とパンカラ性
47	沖縄	新里 恵二	亜熱帯の島々	位置と面積と人口、気候と風土、沖縄の歴史の特色

『県史シリーズ』山川出版社、1970 より

州圏との関係が強い。自然条件からいっても、日本海を南下する寒流がUターンして北上し、対馬暖流と交わるところが、島根半島の西端あたりとなっている。昔も今も、東と西の文化・経済が交流して接点となっているのが、この島根県である」(島根 p. 3 :以下、出典をこのように県名とページ数で示す。表1と照合)。この語りは、愛知県出身の私にとって意外であり、新鮮であった。というのは、東西文化の接点となる地は日本の中央に位置する愛知県しか、やや大目にみて中部地方の各県しか、ないと思っていたからである。私はかつて平凡社の『世界大百科事典』での「愛知県」を説明する際に「東西文化の結節点」という見出しをつけたし³⁾、塚本学も表1に示したように愛知県の歴史の副題に「東西文化の接するところ」と冠している。三重県の西垣晴次が「東・西日本の接点」と形容するのもうなづける。

では、なぜ、日本の中央からみたら僻遠の地にある島根県も「東西文化の接するところ」なのか。それは内藤の上述の説明のごとく、納得のいくものである。いいかえれば、日本中すべての県が「東西文化の接するところ」であり、各県内での都市、農村いずれもそれぞれのレベルで東西文化の接しないところはないといってよからう。こうした観点で地域を語ることは、悪く言えば自己中心的かもしれないが、従属論を感じさせない力強さがある。ところが、内藤を始めとして、県民気質を述べる段になると、歴史家の記述はあまりにも環境決定論的になってしまい論理の整合性を失ってしまう。島根県の「東西文化の接するところ」に続く下りをしばし引用してみよう。「東西の両方から適当に影響され、適当に引っ張られる。それだけに立場はアイマイにならざるをえなくなる。中途半端ですまされるのである。県民性の欠点として批判されている消極主義、事なき主義、権威主義などの背景は、こうした要因からも考えてみることができるのはなかろうか。寒流と暖流が交わるという立地条件は、なんでもある、なんでもできる豊かな地域を、自然が作り出してくれたのである。果樹でいえば、リンゴもできるし、夏ミカンもとれる恵まれたところである。豪雪山村総合センターもあれば、椿の花の名所があつたりする。気候や自然の条件には、むしろ恵まれているといわなければならない。山の幸、海の幸は豊富。それだけに、こうした自然にはたらきかけて、さらにより多くの富を得ようという積極的な営みに欠けている。無理をしないでもなんとかやっていけるという考え方である。だから近代化の過程では、後進的性格を濃厚にしてくる」

東西から適当に引っ張られるのは、どの県でもそうである。だからといってどの県の県民性も、アイマイで消極主義で、事なき主義で、権威主義とはいえないだろう。豪雪山村センターもあれば椿の名所もあるからといって気候や自然に恵まれているとは決して思わないし、たとえそうだとしても、恵まれているが故に後進的性格を濃厚にしてくる、とは決していえない。地域を説明する際の明快な記述に比べて、県民性を語ることの難しさが露呈されている。

3. 風土論

「風土」論は、単純に気候学的、土壤学的解説ですますことができなく、そこでは「地域と人

間の関わり」を論ずることが宿命とされている。上記の歴史家が県民性を語る際に恐らく影響を受けたであろう2つの大著：和辻哲郎『風土 人間学的考察』¹³⁾と鈴木秀夫『風土の構造』¹⁴⁾をここで挙げておきたい。和辻は風土の特性をモンスーン、砂漠、牧場という3つの類型に分けてそれぞれの地域でおりなされる人間、社会、文化の考察をしている。それがあまりに明晰に述べられているので読者に与えるインパクトは強い。和辻はモンスーンの特徴として「湿潤」をあげ、われわれ人間は湿気に耐え難く、なぜ自然への対抗を呼びまさないかと問い合わせ、その理由を2つあげている。1つは、「湿潤が自然の恵みを意味するからである」(傍点和辻)とし、「かくして人間の世界は、植物的動物的なる生の充満し横溢せる場所となる。自然は死でなくして生である。死はむしろ人の側にある。だから人と世界とのかかわりは対抗的でなくして受容的である」という。他の1つは、「湿潤が自然の暴威をも意味することである」とし、「暑熱と結合せる湿潤は、しばしば大雨、暴風、洪水、旱魃というごとき荒々しい力となって人間に襲いかかる。それは人間をして対抗を断念させるほどに巨大な力であり、従って人間をただ忍従的たらしめる」そして、「かくして我々は一般にモンスーン域の人間の構造を受容的忍従的として把握することができる」と結論付けている。論旨は明快であるが果して湿潤は人間をただ忍従的たらしめているのであろうか。毎年決って大雨、暴雨、洪水、旱魃を被る日本は、インドは、そしてバングラデシュは、その猛威が対抗を断念させるほどに巨大であるものの、断念するどころかその対策のために忍従的ではなく攻撃的にならざるを得ないのではないか、と私は思う。こうした疑問は随所にあり、それを指摘批判することはたやすい。しかし、そうした議論を続けることは生産的ではないし、和辻の意図にそぐわないであろう。和辻は著書の副題に掲げた「人間学的考察」をするために風土をとりあげたのであり、人間が存在するための環境の重要性を提言したのである。

気候学者鈴木秀夫の風土と人間の関係論もきわめて大胆である。氏は冒頭で「気候と離婚に関する部分から読みはじめていただきたい」とアピールして、戦前時における多雪地帯と高離婚率との一致を示し、離婚と気候の関係を認めてしかるべきであると主張している。両者の関係が素直に認められない人のための中間項として、隠居の居住形態、本・分家間の序列と交際、持家1世帯当たりの畠数分布、および部屋の間取の型の分布という4図を示し、それらがいずれも雪の多い日本海側に高いことと関係付けている。すなわち、雪の多い地方では隠居が別の棟で起居することは危険であるから同居するようになり、同居すれば人間関係の破綻が生じるであろうという。隠居が同居すれば本家の力が強くなるであろうから同地域で本家・分家に格差が生じてくる。畠数が雪の多い地方で多いのは、そこでは戸外の生活が限定されるために、広い生活空間を求めるからだという。さらに、同地方では広間型の家が多いことを示し、そこでは一家が広間のいろりを中心にして生活がおこなわれる時間が多く、なおかつ、隠居が同席していて嫁が批判の対象となることもまた多く、それが、離婚につながったのではないだろうかと推測している。

この中間項の提示によって気候と離婚の関係が有りそうだと納得することはできる。しかし、4つの図の内、畠数の分布図に関しては他の3図とは矛盾した中間項となっている。厳密には1

世帯当たりではなく1人当たりの畠数で考察すべきであったと思うが、ともかく畠数が多ければ家の中での棲み分けもでき人間関係の破綻は生じにくく、したがって離婚も少なかったのではなかろうか。このように説明自体に納得できない部分があるといって鈴木を批判することはたやすい。しかし、それ以上に、私は、一見関係なさそうな気候と離婚について、分布の一致が見られることを強調した鈴木の見解は、たとえ現段階でその説明が満足に語られなくても、分布図から地域を語ることの重要性を説いた点で非常に意味深いものであると評価したい。

4. 中心と周辺

鳥取県が山陰の僻陬^{へきすう}(かたよった隅)にあるといういいかたは、明治初年の公式の文書や記録によくみられる(鳥取 p. 3)。ところが、幕末の因州(鳥取)藩は、外様ながら表高32万石の山陰第一の雄藩として重きをなし、幕末の政局でその動向が注目されていた。明治を境にして何故このような捉えられ方の差が生じたかというと、一極集中の近代化が遂行された結果として捉えることが出来よう。

では、近世以前はどうか。さらにその地の結節点としての重要性が語られている。「出雲となるんで神話と伝説の国といわれる因幡・伯耆は、古くは大陸からのすすんだ文化が流入するにつごうのよい玄関の位置にあった。韓国の東海岸から小舟で乗りだせば、それはリマン海流にはこぼれ、齋陵島・竹島・隱岐諸島をへて、大山をめざせばたやすくこの地にやってこられたであろう。また、古代国家のさかえたころは、山越えの道をとおらねばならなかつたものの、都に比較的近かった。『延喜式』では因幡は近国、伯耆でも中国とされていたわけである。前方後円墳のいちじるしい発達、県下各地にたどることのできる条里制の跡などによって、畿内の先進地域の影響がはやくからみられることも事実であった」。当時の宮都であった奈良京都に対して、周辺の地ではあったものの、その文化圏内に位置づけられ相当密な交流があったことがうかがわれる。それと同時に、日本海をとおして韓国との結びつきがかなり強かったものと思われる。

私がかって鳥取砂丘横の海岸でハングル文字のポリタンクを目にした時、韓国がぐっと近くに感じたし、その後、島根県立図書館で島根県への韓国からの漂流者の記録がおびただしく残されていることを知り、ごく最近まで闇のルートとはいえ韓国からの文化の流入が古代から絶え間なく続いていたことは驚きであった。いいかえれば、近世までの長期にわたって日本海沿岸諸県は太平洋諸県よりもはるかに国際的であったということができる。

文化交流の道として海の果した役割は大きい。瀬戸内海は大陸文化の導入および国内交流の一大動脈であったため、瀬戸内海沿岸諸県はいずれもその先進性をうたっている。「吉備地方が東瀬戸圏の中核にくらいしていたことは、先進的な文化の伝播・定着化をうながす大きな要因であった。…いわば外来文化的な風土」とするのは岡山県(岡山 p. 4)、「すでに古代に遡って、内陸航路は中国・朝鮮との通航に結ばれていたし、とくに畿内と九州を結ぶ回廊ともいわれる役割を果した瀬戸内の中枢部を占める芸備の港の発達は政治・経済的にも文化的にも独特の意味を持つ

ものであった」というのは広島県(広島 p. 5)。山口県はその最たるもので「清盛にしたがって日宋貿易に利をおぼえた海賊は、やがて倭寇として中国大陸に押しだし、朝鮮半島を荒して引き上げてくる。その通路を扼する関門海峡は倭寇の死命を制するところとなり、そこを占有する大内氏は博多商人とむすんで、日鮮・日明貿易に絶対有利な地歩をかためた。…本州西端の関門として、大陸に接近した位置を占めているという地理的な条件はいささかもかわることなく、今後においても山口県の歴史の展開に、大きな役割を果すものと期待されている」(山口 p. 3-4)。

ここで「西端の関門」の意味をもう少し考えてみよう。言いかえれば、周辺の地の捉え方なのであるが、私がかって「第三世界論」⁵⁾で触れておいたように、いわゆる従属理論における「周辺」(第三世界)は、つねに「中心」(第一世界)に対して従属的で、略奪され、後進的であることを構造的に強制されている。これに対して「周辺」には「フロンティア」という意味も付与されている。「中心」から遠方に位置する(僻地である)がゆえにその束縛から自由であり、あらたな時代を創造するダイナミックなエネルギーがそこにはある。「後発性の優位」とか「辺境革命」とよくいわれる場もある。すなわち、私は「周辺」を地理的位置の上での僻地という受動的な意味とともに能動的な意味をも合せ持った両義的の場所として定義しておきたい。そしてその場所は時代によって「僻地」と「フロンティア」の間を振子のように揺れ動くのである。

日本の西端の長崎県、現在は僻地の時代に甘んじてはいるが、江戸時代はフロンティアの時代であった。「近世鎖国時代、長崎がわが国でただ一つの海外に向けて開かれていた窓であったことはよく知られている。…新しい光は長崎からの感があり、西欧諸国の進んだ文化は、長崎のわずかに開かれた窓を通じて、鎖された日本にとうとう絶えることなく流れ込んできた」(長崎 p. 4-5)。

薩摩、長州、および土佐の3藩が徳川幕府を倒したのは、いずれも外様という立場からの反発という社会的な要因だけではなく、その位置する「周辺」という場所の持つ意味が意外に大きいように思えてならない。近世におけるフロンティアとしての蓄積が大きくものをいったのである。

周辺こそが中心を支えているのだと、むしろ周辺の僻地性をパラドキシカルに、かつ積極的に評価するカレンの論考⁶⁾は興味深い。近世に自治政治経済圏を確立していた下伊那の中心都市飯田とその圏域は、近代養蚕立国と化した東京中心の階層的地域構造への転換の中で完全に末端の位置に編入されてしまった。こうした地域が日本には数多く生じたが、それが東京を経済的にアジアの盟主にさせたのだと、日本の近代化過程を「周辺」からするどくみすえている。

5. 先進地と後進地

空間的な位置関係での中心・周辺論に対して、時間的な優劣が問題になるのが先進・後進地論である。ここでは現在後進地というラベルを張られているところもかっては先進地であった時代を経験していること、および見方によっては、何を基準にするかによって先進・後進のラベルは張り替えうるということを指摘しておきたい。

日本海側諸県は中世渤海など大陸との交流があった時代、および近世北前船の時代は先進地であったといえよう。島根県出雲にいたっては古代、神の国として奈良と双璧の地であった。

次に中央から見て、周辺で後進地とみられる佐賀県を例に取ってみよう。佐賀県は後進地か、先進地か。中央に住むものにとって佐賀県は、九州にあって福岡と長崎にはさまれた目立たない県に映る。ゆえに先進地とは思わない。しかし、先進地ということもできる。「佐賀藩は幕末になると、富国強兵ために西洋文化を輸入し、その方面では全国の先進地域になった」(佐賀 p. 6)とある。ようするに何を基準にするかが問題であり、何か特筆されるべきものがどの県にも1つはあるはずだから、それを主張すれば、どの県も先進地であると名乗りをあげることができる。そして、同じ基準で地域を論ずる際にも、例えば、考古学上の発見でもあれば、一夜にして先進地になってしまうことさえある。長い歴史の中で、先進地になったり後進地になったりすることがある、という現実を知ることが大切なのである。

先進、後進がいかに意識されているかという点について東京から北へ向う諸県について見てみよう。順次先進性が弱まっていくであろうとの予想に反して、東京を一步出た瞬間に後進地になってしまう。青森県、秋田県にその寒冷な気候と不便な交通から後進性がうたわれているのはうなづけるが、茨城県と栃木県の副題、見出しにわざわざ「後進性」という言葉を掲げられているのは、そのギャップをまのあたりにしているからであろうか。そんな中で宮城県は「みちのくもなか」の国として東北6県の中心としてその存在を示しているし、福島県は「みちのくの玄関」として先進・後進の両面性をうたっている。それは福島県人気質にもあらわれ「全国的にみれば東北人の性格をもちろん、東北の内でみれば東北人特有のねばり強さおよび純朴さという点で、本県人は東北北部の人びとにはおよばないと思われる。その反面、進取の気性では、よりすぐれているといえよう」(福島 p. 6)ということらしい。それが、海を隔てて北海道まで飛んでしまうと東京に対する後進意識は薄れ、同化および対抗意識があらわれてくる。「いつか梅棹忠夫氏は、「日本探検」のなかで、北海道の人間には“リトル東京”に表現される中央に対する同質化傾向と、北海道は特別なんだという異質化傾向と、二つの相反する傾向があると論じたことがある。じつは、これはかならずしも相反するものではなく、同じ根のものである」(北海道、p. 6)。

6. 日本の縮図論

スケールを越えてミクロをマクロと同スケールで語る構造主義的な方法が縮図論である。その例が奈良県であり、見出しに「大和は全国の縮図」とある。「大和には山あり川あり高原あり平野ありである。ないのは海だけである。畿内先進地区大和といわれるが、近畿随一の秘境をも擁している。交通に和歌山県高野山を迂回するのを便とする吉野郡野迫川村のごときもある。ありとあらゆる地勢をそなえている。まさに日本全国の縮図といえよう」(奈良 p. 7)。海がなくても日本の縮図といえるのだから、海を持つ諸県は奈良県以上にミニチュア日本を主張してよからう。私は前稿で隱岐という離島を取りあげ、その地域特性を述べるにあたって、各村落が農業、

漁業、林業の三昧一体を基本としていたこと、さらには戸口規模のいかんにかかわらず水田、畑がもうけられ、かつ新田畠開発も行っていたことを示し、その複合的な営力が、スケールを違えてよりミクロな世帯単位でも、あるいはよりマクロな隠岐島全体でも同じようにみられることを述べた⁷⁾。隠岐という特殊な位置にある離島においても日本の村落の一般像がみられることを指摘したのであるが、そこでは異質よりも同質を探ることに重点を置いており、そうした方法は「日本の縮図論」に通ずるものといえよう。

III 東牛西馬論

1. 東の牛

鎌倉時代後期、1310年（延慶3）の『国牛全図』に「馬は関東をもって先とし、牛は西国を以てもととす」とあり、馬と牛の地理的分布が明瞭になっていた。時代はさがって江戸、明治初期になっても、東日本の馬地域と西日本（南四国、南九州を除く）の牛地域とは2分されていた（図1）⁸⁾。

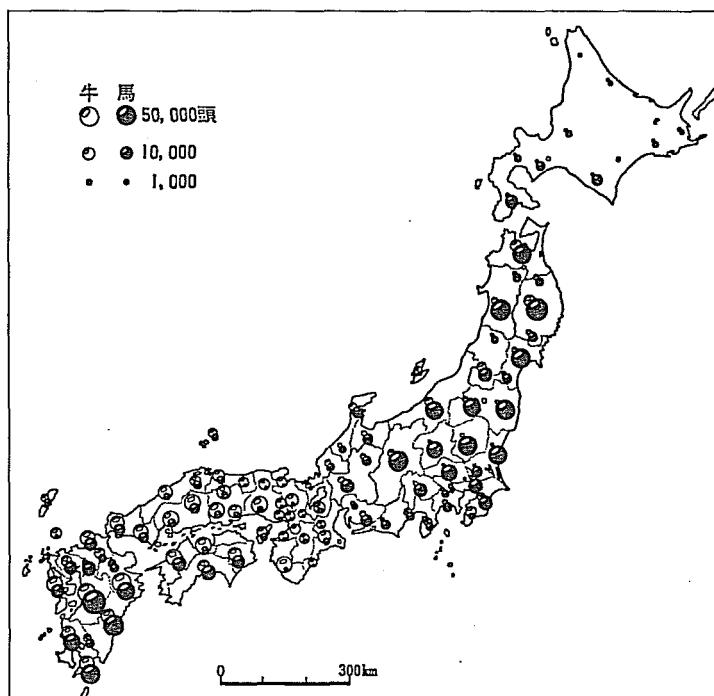


図1 明治19年における国別牛馬飼育数

市川健夫『日本の馬と牛』東書選書、1981、p.19による。

東の馬、西の牛として東西の日本の特色をあらわすのは間違いではない。地域の特色を強調して地域を比較するのは明快で記憶にとどめやすい。「見ロ vs 見ヨ、見イ」、「イロリ vs カマド」、「イエ的社会 vs ムラ的社会」、「落葉広葉樹林帯 vs 照葉樹林帯」など言葉、民俗、歴史、文化についての東西地域論は大野晋・宮本常一『東日本と西日本』⁹⁾、網野善彦『東と西の語る日本の歴史』¹⁰⁾、大林太良『東と西 海と山』¹¹⁾などの書物に詳しく語られている。また、郷土の偉人をあげ風土と関連づけて述べるのもそうした方法の1つであり、司馬遼太郎の語りはまさにその域に達している¹²⁾。

しかし、ここでは、そうした方法をあえてとらない、もう少し地域の全体をみたい。すなわち、地域の代表に挙げられなかつた方にも目をやり、その重要性を強調したい。

中部地方は馬の文化圏である。古くは信州、甲州の御牧、近世飯田街道での中馬¹³⁾しかり。近世尾張の地誌『寛文村々覚書』(1670年代)、および『尾張徇行記』(1820年代)の1,000余の村に牛はほとんど姿をみせていない¹⁴⁾。これら馬の世界に、牛はいないのか、まずは市川健夫『日本の馬と牛』¹⁵⁾を参照しつつ、それを探ってみよう。

江戸時代、「日本の屋根」といわれる中央高地では、宿駅ごとに継立てる伝馬輸送、あるいは付け通しをする中馬輸送にも馬が使われていたが、部分的には「中牛」¹⁶⁾と呼ばれる輸送機関があった。木曽の中牛は、尾張藩から「尾州岡船」の鑑札をもらい、北は松本、西は美濃の国今渡から名古屋に及んでいた。北アルプス野麦峠はけわしく、馬ではなく牛がもっぱら使われた。奈川十ヶ郷には1838年(天保9)に牛方が83人いて415頭の牛を追っていた。また、信越国境の小谷地方に何百人という牛方がいて、「一綱七頭」といって1人が5~7頭の牛を追って塩、魚を運搬していた。さらに、標高2,172mの渋峠を越える草津街道の荷送りは、馬を使った荷送りは難しく、駄牛と歩荷が行われた。そのため草津街道は「牛道」と呼ばれた。幕末になると、当初「手牛」と呼ばれる副業的な駄賃稼ぎであったのが、山間地で経営耕地の少ないと専業化し、年に40回も往復するものが出ていた。草津街道で使われた牛はすべてが南部牛と佐渡牛で険阻な山道に強かった。明治中期以降、道路改修が進められたことにより牛から馬に、さらに電車、車に輸送手段はかわっていったが、牛の時代があったということははっきりと記憶に留めておく必要がある。

以上の事実から注目される点が2つある。1つは、東西、あるいは南北の地域差論に加えて、高低の地域論が展開されること。これは山岳地帯の中部地方ならではの特色かもしれないが、標高の高いところでの駄牛の活躍は注目される。他の1つは、馬の文化圏内の牛の文化圏の存在である。

江戸・明治期の牛の利用に関して、そのほとんどが中西が示した農耕であり、市川が述べた運搬であった。その他の利用法についてはほとんど語られていないが、ここでは愛知県知多半島最南端の海村ならではの牛利用を紹介しておきたい。片名村という。『尾張徇行記』(1822)によれば、村高546石、田15町余、畠19町余、99戸、459人の中規模平均的な村に牛が36匹、馬が2匹い

た。これは馬の文化圏内にあって異常な牛の多さである。片名村の村況が次のように述べられている。「此村ハ大井村ヨリ街道通リ海浜ニ傍民屋建ナラヒ、一村立ノ所ニテ構ニ竹木ナク小百姓ハカリナリ、高ニ准シテハ戸口多ク佃力足リ他村へ佃畠ヲ捷ナシ、其内師崎ヘ越百四十五石アリ、此村ハ海浜ニ住ヒヲシナカラ漁業漕賈ヲ以テ産業トスル者ナク、其内今漁家只一戸アリ、サレハ農務ヲ以テ第一ノ営ミトシ、ココハ古ヘヨリ牛ヲ多ク飼フ所ナリ、是ハ藻草ヲ牛ニスマセ踏糞ヲ多クコシラヘ専ラ田圃ヘ培ヘリ、干鰯ナトツカフヨリハ踏糞ヲ用ユルカ土地僻ヘ付割合ヨロシト云、此アタリの牛ハ奥州南部ヨリ率来ルト也、此村田面ハ村西ノ方山間ヘ付処々ヘイリコメリ」¹⁶⁾(傍点溝口)とある。

この村は海に面しているから海村といってよからうが、隣接する師崎とは異なり漁家が1戸あるだけで海運業者もいない農業中心の村であった。ところが藻草は多くとれたらしくそれを肥料として田畠に投入していた。ここで牛が登場。藻をそのまま投入するのではなく牛に踏ませて「踏糞」といわれる魚肥より効果のある肥料を作っていたのである。牛の出自についてはさらに興味深く、牛の文化圏の中心である近畿地方に接するにも関わらず、近畿からではなく遙か彼方の奥州南部からとある。前述したように「草津街道で使われた牛はすべてが南部牛か佐渡牛」とある。馬の文化圏内の南部とは一体いかなるところなのか。

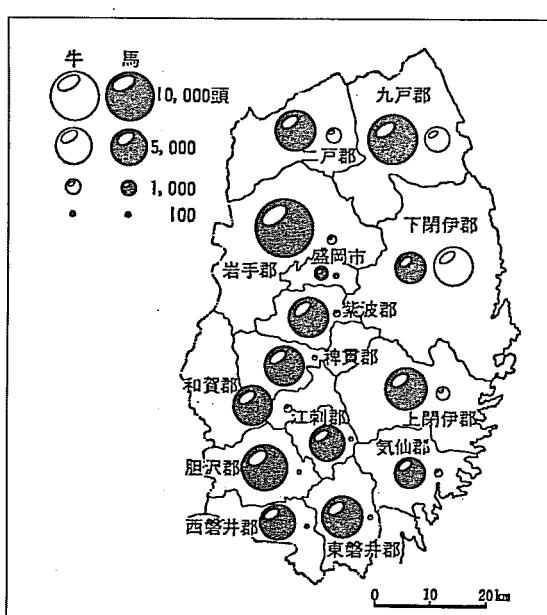


図2 岩手県における郡別牛馬飼育頭数（昭和8年）

市川健夫『日本の馬と牛』東書選書、1981、p.126による。

南部に飛んでみよう。江戸時代、牛は閉伊郡に8,000頭、九戸郡に4,000頭と、南部牛の3分の2以上が集中的に飼われていた。また昭和8年における岩手県の郡別牛馬頭数をみても（図2）、この両郡に牛が多く飼われており、江戸時代からの駄牛の歴史が、昭和期に入っても生きていたことを示している。その起源は1454年（享徳3）、田名部城主が蒙古韃靼から馬とともに牛を何百頭も輸入したことが伝えられているが、定かではない。しかしながら、生産された南部牛は、現地で使われもしたし、他国へ移出もした。平坦地では足の速い馬の方がよいが、けわしい山道では牛の方が適していた。南部牛は北上山地の砂鉄を利用してのタタラ製鉄で生産された粗鋼を運ぶほか、三陸海岸から塩や干し魚、昆布などの海産物を内陸部へ、一方、内陸から米・酒、日常生活品を北上山地や三陸海岸へ輸送していた。

また、他国用の牛も飼育されていた。安房国や上総国君津郡など房総半島南部へ1～2歳の牝牛

を年800頭、越後国的新潟平野へ2歳牡牛700頭、2歳牡牛200頭など各地へ移出されていた。最遠の信州までは600キロあり20日以上を要したといわれている¹⁷⁾。そこに知多半島を加えればさらに2、3日の日程を要したであろう。牛追いの道はまだ明らかにされていないが、物資のみならず文化の道としても重要な役割を果していたものと思われる。東日本の馬文化圏内での牛文化、究明する価値は多いにありそうである。

2. 西の馬

逆に、牛の文化圏での馬の存在はいかなるものであったか、次に考察してみよう。

牛は農民的家畜であり、馬は武士的家畜だといわれる。牛が西日本に卓越しているのは、わが国の先進地で、牛車や犁耕が普及していたことに関係がある。畿内では道路の整備が進んだため、牛車の利用が可能となり、また条里制水田が広く分布していた西日本では、牛耕がいち早く発達した。一方、東日本に馬が多かったのは、中世を通じて東国の武士団が騎馬を重要視したことの一因があったとされている。

たしかに、図1を見れば東の馬、西の牛といってよからう。そしてその説明も上記のごとくうなづける。ただここでもう少し注意深く分布図を眺めると、次の2点が指摘される。1つは数の差はあれども県にも牛・馬がいること、他の1つは「東の馬」と言い切るには抵抗を感じる馬が九州各県および南四国に飼育されていることである。この分布を耕牛・耕馬に限られるが中西亮太郎の『徵發物件一覽表』(明治19年)を分析した成果¹⁷⁾をもとに検討してみよう。氏は郡別にその分布を検討し、大局的にみて、東日本耕馬地域(若狭湾-伊勢湾を東西の境とする)、西日本耕牛地域(近畿、山陽、山陰)、九州・四国耕牛馬地域があることを示し、その中に耕牛馬稀少地域として北陸、東海、東京周辺、鹿島・九十九里、東信・北信、蒲原、村山の7地域、西日本で馬耕が卓越する地域として筑後、南宮崎、東日本で牛耕も盛んな房総・伊豆、南部地域が点在していることを指摘した。分析単位を県よりミクロな郡にとったことにより、従来の「東馬西牛」論に再検討をせまる分布が示された点は高く評価されよう。

さて、次に中西が西日本耕牛地域としたところでの「馬」を存在をさぐってみよう。周知のとおり、中国地方の山間地帯は、わが国における最大の和牛生産地である。古代から畜力を農耕に使用してきた近畿、山陽地方に移出されてきた。また中国地方に広く分布したタタラ製鉄の燃料用の材木を伐採した跡地は恰好の牧草地となったり、木炭、砂鉄、食料などの運搬に大量の駄牛が必要とされた。日本海に浮ぶ見島、隱岐はいずれも牛の産地として有名である。そこへの牛の供給として、出雲産の種付け牛が導入されたとある。こうした牛の文化圏において馬がどの程度史料に出てくるか、島根県を例にとって、みてみよう。まず、近世の地誌をひもとくと、『増補隱州記』貞享5年(1688)¹⁹⁾では、隱岐49カ村合計で牛3,687頭、馬2,971頭いたことがわかる。隱岐の典型的農業経営に牧畠があり、近世はその全盛期であった。牧畠に欠かせないのが4年に1度の休閑地を利用しての牛馬の放牧である。これらがすべての村で飼育されていたのであり

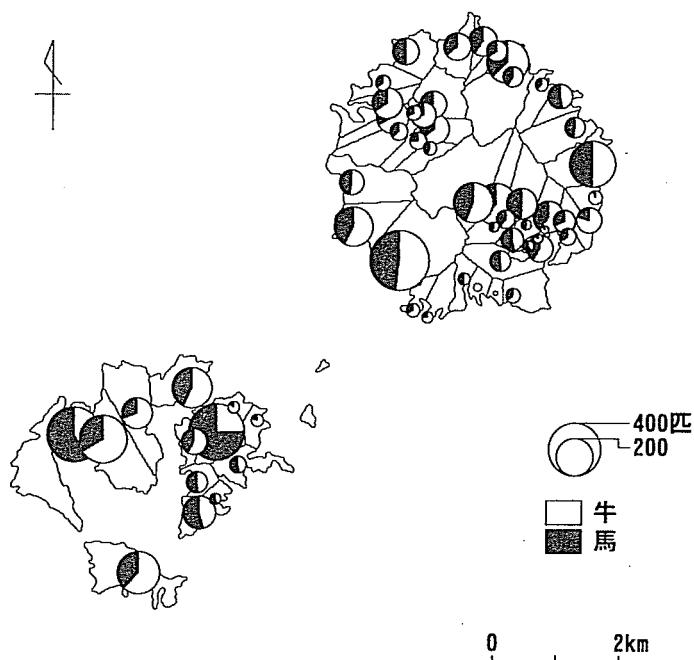


図3 隠岐における村別牛馬数（1688）

『増補隱州記』（貞享5年）による。

（図3）、1村平均は牛62.5頭、馬50.4頭、さらにこれを1戸当たりに換算すると、各百姓世帯が牛、馬各1頭所有していたことになる。三橋時雄は、寛文2年（1662）の元屋村差出帳をもとに、4軒の間脇（無高）以外の百姓は、全部が、そして僧侶、神主までも牛馬を飼養していることを示した²⁰。次に『雲陽大数録』宝暦年間（1751－64）²¹記載の郡毎の牛馬数を示そう。島根郡（牛766頭、馬22頭）、秋鹿郡（牛357、馬27）、楯縫郡（牛809、馬171）、出雲郡（牛311、馬318）、神門郡（牛2,414、馬698）、能儀郡（牛204、馬92）、意宇郡（牛1,358、馬130）、大原郡（牛2,066、馬190）、仁多郡（牛1,111、馬377）、飯石郡（牛1,688、馬294）である。数からみれば牛が馬を圧倒しており、牛の文化圏であることには違いない。が、各村、各郡いずれにも馬がそれなりに存在していたことは注目される。

最後に『新修島根県史』の資料編で近世時に牛、馬の出てくる史料を拾い上げ下記に示してみよう。

1) 越智郡羽須美村

- ①「阿須那牛馬市関係文書」明暦2年（1656）：「一、牛馬市日限之外、一日ニ而も興行致間敷事」
- ②「覚」天和2年（1682）：「一、…殊に近国備後、安芸、雲州牛馬商売之市ニハ…」

③「御断申上ル口上書之事」元禄3年(1690)：「一、阿須那市町、毎年次第ニ牛馬市おとろヘ、近村迄も痛申候、子細ハ商人ばくろう共無仕合ニ而、牛馬買出シ不足ニ付、諸方より之牛馬買出シ不足ニ付、諸方より之牛馬買人參り兼申候条…」

2) 八束郡宍道町

①「宍道駅諸市願」天明3年(1783)：「一、…馬士并御登米被仰付候節、…舟馬難持湛時節も、…」

②「宍道木綿市願」文化5年(1808)：「一、…馬方、舟方、宿々藏敷、…」

③「宍道駅馬関係愁訴演説書」文政3年(1820)：「一、…馬持人数四拾七人御座候内、廿四人一組ニ相成、…依而農業之透間ニ者馱貲取る之荷物、并塩手荷負せ、…宍道町津出し之節、百姓銘々牛馬を以津出シ仕、…」

3) 大原郡加茂町

①「加茂木綿市愁訴一途」文化4年(1807)：「一、三刀屋町は、駅所に而、鉄荷等莫太出候場所、其上、牛馬市等も之有、…」

②「加茂牛馬市関係願」文政2年(1819)：「一、…往古は加茂町も木次、大東同様の馬継場所にて、…加茂馬にて津出行届不申、…牛馬市には莫大のこやしも取れ候得者、…」

以上、不思議なことに、「牛馬」と牛、馬がセットになって扱われている史料が多いことは、馬と牛が共存していたことの現れであり、その一方で馬だけの史料はあるものの、牛だけが登場することはなかった。運輸、市場関係の史料が多いこともあるが、馬の交通手段としての価値は、この地域においても非常に高かったといえよう。先の『雲陽大数録』に馬継ぎの村が、島根郡15ヶ村、秋鹿郡3ヶ村、楯縫郡8ヶ村、神門郡9ヶ村も記載されている事からもその重要性がうかがわれる。

のことから、牛の文化圏に属しているとみなされている島根県は、決して牛の文化圏に埋れているのではなく、歴然とした馬の文化圏でもあるといえよう。日本の文化論を語る幾多の書物が「東の馬、西の牛」と決めてかかっているのは、どうかと思う。

IV おわりに

ある歴史家の「島根は東西文化の交わるところ」という語りから、思いは古今東西をかけ巡り、従来の地域論とは異なった切り口で、そしてあえて意図的に強調する形で地域を考えてみた。階層的文化圏論、周辺両義論、先進地後進地逆転論、複合的東西文化論というような内容の本稿は、切り捨てられてしまっていたものを復活させる試みであり、それが私の地域論の思想的中核をなしている。

注

- 1)『県史シリーズ』(1 北海道の歴史～47沖縄県の歴史)、山川出版社、1970。
- 2) 溝口常俊「愛知県」、『世界大百科事典』平凡社、1984、28-29頁。
- 3) 和辻哲郎『風土 人間学的考察』岩波書店、1935。
- 4) 鈴木秀夫『風土の構造』大明堂、1975。
- 5) 溝口常俊「第三世界論」、中藤康俊編『現代の地理学』大明堂、1991、190-207頁。
- 6) Karen Wigen, *The Making of a Japanese Periphery 1750-1920*, University of California Press, 1995。
- 7) 溝口常俊「隠岐の地誌『増補隠州記』(1688) の分析」名古屋大学文学部研究論集・史学46、2000、39-66頁。
- 8) 市川健夫『日本の馬と牛』東書選書、1981、19頁。
- 9) 大野晋、宮本常一他著『東日本と西日本』日本エディタースクール出版部、1981。
- 10) 綱野善彦『東と西の語る日本の歴史』そしうて、1982。
- 11) 大林太良『東と西 海と山』小学館、1990。
- 12) 司馬遼太郎『街道をゆく』(1～29) 朝日新聞社、1971～1987。
- 13) 古島敏雄『古島敏雄著作集 第一巻 畇役労働制の崩壊過程－伊奈被官の研究－』東京大学出版会、1974。
- 14) 溝口常俊編『江戸期なごやアトラス』名古屋市総務局、1998、24頁。
- 15) 前掲8)、185～188頁。
- 16) 名古屋市教育委員会『名古屋叢書統編 第八巻 尾張徇行記(五)』1969、311-312頁。
- 17) 前掲8)、127-129頁。
- 18) 中西僚太郎「明治前期における耕牛・耕馬の分布と牛馬耕普及の地域性について」歴史地理学169、1994、2-22頁。
- 19) 島根県『新修島根県史 資料編2 近世上』、1965、169-261頁。
- 20) 三橋時雄『隠岐牧畠の歴史的研究』ミネルヴァ書房、1969、135頁。
- 21) 前掲19)、130-168頁。